

科目	学部	学科	専攻・専修・コース
専門科目	文芸学部	文芸学科	文化専修
受験番号	氏名		採点

次の文章を読み、設問に答えなさい。

東京を訪れる外国人に、私はいつもつぎのように説明せざるをえない。

「東京は世界の首都のなかでも異例な都市だ。何しろ百年前の住宅すら、もはや見つけ出すのが難しいのだから……」

震災と戦災で東京の大半が二度も焼土と化し、しかも高度成長期の破壊と改造は、都市の風景を一変させた。西洋文明を貪欲に摂取してつくり上げられた明治期の独特の都市の相貌も、もはや絵や写真で見るとしかなく、といった異常な状態に我々は置かれている。過去の顔を失ったかに見える巨大都市東京……。

それに対し、先日、私は初めてアメリカを訪ね、ニューヨークの町を見て驚いた。現代文明の最先端を行き、ある意味で東京の手本のような都市かと思っていたこのニューヨークの町並みが実は、基本的には一九世紀後半から今世紀前半にかけての古い建物で構成されているのである。しかも、その中に一九二〇年代、三〇年代の重厚な様式の摩天楼が何本も立ち上がってスカイラインを形づくり、都市に風格を与えている。特にアール・デコの様式で知られるエンパイアステート・ビルやクライスラー・ビルは、実にシックな建築であるのに加え、夜の照明効果も素晴らしく、今でもこの都市の象徴として君臨している。

超モダンな現代の摩天楼は、むしろそれらに負けじとユニークなデザインを競いながら、またその中から立ち上がっているように見える。セントラルパーク周辺の華麗な建築様式を誇る高級マンション街、グリニッチ・ヴィレッジの趣きのある古い住宅街などを歩いていると、これがニューヨークなのかと疑いたくなるほどなのである。現代の様々な文明を続々と生み出すニューヨークが、一方でこのように古くてシックな町であることに、私は強烈な印象を受けた。

とはいうものの、一九二〇年代、三〇年代の建物さえどんどん壊し、古い建物がめっきり少なくなった東京の都市空間が、ニューヨークに比べてつまらないかという、必ずしもそうではない。ニューヨークのマンハッタンは、初期の核にあたる一部の地区を除けば、その大部分は一九世紀前半に計画的に建設された格子状パターンで見事に支配されている。南北に走る広いアヴェニューと東西に走るストリートの組み合わせで、理路整然と組み立てられたこの都市は、目的の建物を探すのはいとも簡単で便利であるが、あまりに単純明快なこの都市空間は、地上を数日歩いていると、そろそろ退屈さを感じさせる。

それに対し、東京の都市空間は、明快さを尊ぶ近代の合理主義からすると、全体像がまことにつかみにくい。しかし、古い味のある建物が少なくなり町並みに風格が失われつつあるのは事実としても、実際に東京の町を歩いてみると、思いのほか地形に変化があり、山の手では坂や崖、曲がりくねった道、鎮守の森や屋敷の緑、下町では掘割や橋、路地や店先の植木鉢、そして盛り場の賑わいなどが景観の変化を次々に与えてくれる。このように東京の町歩きには、常に意外性が待ち受けている。そしてこれらの景観的要素は、どれも考えてみれば、都市のそれぞれの場所と結びついた立派な歴史的な要素なのである。ニューヨークのような古い建物はなくとも、場所そのものが歴史のなかで培われた独特の雰囲気をかもし出しているのが東京といえるのではあるまいか。そして近頃では、こうした環境の文脈を生かして設計され、場の魅力をさらに高めているような現代感覚あふれるすぐれた建築にもしばしば出会うことができる。ところが、日頃我々はあわただしい生活に追われて、地下鉄や車で移動することに慣らされ、ゆっくり町を歩く機会が少ないために、こうした町の魅力に不感症になっているのである。

そう考えるならば、東京には百年前の建物がほとんどないからといって、この都市はすでに過去の顔を失いアイデンティティを喪失したとあきらめるのは、早計に過ぎることになる。むしろ東京では、変化に富む立地条件と、その上に江戸以来つくられた都市の構造とが歴史的、伝統的な空間の骨格を根底において形づくっているのであり、それと都市の中身を構成する新旧織り混ぜた様々な要素とが巧みに混淆し、世界にも類例のないユニークな都市空間を生み出しているといえるのである。

……（中略）……

2026年度 共立女子大学 編入学試験 試験問題

No. 2

科目	学部	学科	専攻・専修・コース
専門科目	文芸学部	文芸学科	文化専修
受験番号	氏名		採点

都市は様々な要素が集まって組み立てられている。しかし、建物にしても道にしても決してばらばらということはなく、ある文法によって構造化され、文脈をもって並んでいる。したがって手順を追って読んでゆけば、都市は決して難解なものではない。東京の場合、その個性を演出している根底の文脈は、豊かな地形の上に展開した壮大な城下町江戸の建設とともにあらかた形づくられたといえる。だからこそ、混沌として目に映る現在の東京のなかに空間的骨格を見出すためにも、このように実際に自分の足で歩き、地形とその上に歴史的に成立した土地利用のあり方を体で感じながら「都市を読む」ことが最も有効な方法となるのである。

このような作業を通じて、人々がもはや現代と無関係と思いがちな江戸を対象に、その町づくりの手法やそれぞれの地区の構成について解き明かすことも可能となる。すなわち、こうして作成した都市の復元図は、古地図、文献史料では通常知ることができない町割、地割の絶対寸法、正確な方位、地形のレベル差などの情報をことごとく与えてくれるから、江戸の町に成り立っていた都市の構成原理を細かい部分まで読みとることができ、都市に関する歴史の研究自体が深められることになるのである。こういった方法は都市形成史を研究する上での定石ではあるが、それが東京のように変化が激しく過去と断絶しているかに見える大都市においても有効であるという点はまさに驚きであった。

そしてまた、このような作業は同時に、そういった歴史的構造が、実は現在の東京の町を今なお根底から支えているという事実を明らかにしてくれる。現在の都市の成り立ちを理解するのに直接結びつく、生きた都市史研究がこうして可能となるのである。

